子どもの定期予防接種についての説明書

【医療機関の方へ】
接種する予防接種にチェックし、保護者へ説明書を読んでいただくよう案内してください。

【保護者の方へ】
※ 下記の予防接種は、法律に基づいて受ける定期接種です。この説明書をよく読んで理解し、十分に医師から説明を受けたうえで予防接種を受けてください。
※ 接種に当たっては、接種時点において大牟田市の住民であることが前提となります。

✓	予防接種名	対象年齢	標準的な接種年齢	スケジュール・接種回数	予防する病気	有効性	副反応
□	**B型肝炎**	1歳未満の者	生後2か月～9か月	27日以上の間隔で2回接種した後、1回目の接種から139日以上の間隔をおいて1回	**【B型肝炎】** B型肝炎ウイルスの感染によって、肝臓の細胞が壊れたり、その影響で肝臓の働きが悪くなる病気です。一過性の感染で終わる場合とそのまま感染している状態が続いてしまう持続感染の2通りがあります。持続感染になった人の85～90%の人は無症状で経過しますが、10～15%の人は慢性肝臓病（慢性肝炎、肝硬変、肝臓がん）へ進行します。出世時や乳幼児期での感染は、症状が無い状態で経過することが多いですが、持続感染になりやすいという特徴があります。	乳幼児期に接種すると、ほぼすべての赤ちゃんが免疫を獲得することができ、3回の接種後の効果は、20年以上続くといわれていますが、免疫の獲得や持続期間は個人差があります。	主な副反応は、倦怠感、頭痛、局所の腫脹、発赤、疼痛等ですが、一般的には重大なものは認められません
□	**ヒブ**	生後2か月～ 5歳未満の者	初回接種の開始が生後2か月～7か月未満【接種回数4回】	**＜初回接種＞** 27日以上（標準的には27～56日）の間隔で3回接種 **＜追加接種＞** 初回接種終了後、7か月以上（標準的には7～13か月まで）の間隔をあけて1回	**【Hib感染症】** ヘモフィルスインフルエンザ菌ｂ型（Hib）という細菌によって発生する病気で、そのほとんどが5歳未満で発生し、特に乳幼児で発生に注意が必要です。主に気道の分泌物により感染を起こし、症状がないまま菌を保有して日常生活を送っている子どもも多くいます。この菌が何らかのきっかけで進展すると、肺炎、敗血症、髄膜炎、化膿性の関節炎などの重篤な疾患を引き起こすことがあります。	ワクチン接種により、Hibが血液や髄液から検出されるような重篤なHib感染症にかかるリスクを95%以上減らすことができると報告されています。	全身性の副反応は軽度であり、局所反応として接種した場所の赤み、痛み、腫れなどがみられますが、それらの多くは24時間以内に良くなります。
			初回接種の開始が生後7か月～1歳未満【接種回数3回】	**＜初回接種＞** 27日以上（標準的には27～56日）の間隔で2回接種 **＜追加接種＞** 初回接種終了後、7か月以上（標準的には7～13か月まで）の間隔をあけて1回			
			初回接種の開始が1歳以上5歳未満【接種回数1回】	－			
□	**小児用肺炎球菌**	生後2か月～ 5歳未満の者	初回接種の開始が生後2か月～7か月未満【接種回数4回】	**＜初回接種＞** 27日以上の間隔で3回接種 **＜追加接種＞** 初回接種終了後、60日以上あけて1歳以降（標準的には1歳以上1歳3か月未満）に1回	**【肺炎球菌感染症】** 健康なこどもの10人に2～3人は、鼻やのどの中に肺炎球菌をもっており、細菌が空気の通り道にくっつき、全身に広がります。これらの菌がなんらかのきっかけで進展すると、細菌性髄膜炎、菌血症、肺炎、副鼻腔炎、中耳炎といった病気を起こします。骨髄炎をきたした場合には2%のこどもが亡くなり、10%に難聴、精神の発達遅滞、四肢の麻痺、てんかんなどの後遺症を残すと言われています。	肺炎球菌は90以上の血清型に分類されていますが、現在日本で使用されている肺炎球菌結合型ワクチンは、主な20種類の血清型の肺炎球菌による「侵襲性肺炎球菌感染症」の予防に効果があります。	注射した場所が赤くなったり、はれたりすることはよく起こり、約70%のお子さんにみられます。これらの局所反応は軽く、自然に回復します。全身的な副反応として、発熱、機嫌が悪くなる、うとうとするなどが、約10～20%認められます。
			初回接種の開始が生後7か月～1歳未満【接種回数3回】	**＜初回接種＞** 27日以上の間隔で2回接種 **＜追加接種＞** 初回接種終了後、60日以上あけて1歳以降に1回			
			初回接種の開始が1歳以上2歳未満【接種回数2回】	60日以上の間隔をあけて2回			
			初回接種の開始が2歳以上5歳未満【接種回数1回】	－			
□	**五種混合**	生後2か月～ 90か月未満の者	初回：生後2か月～1歳未満 追加：1歳～1歳6か月未満	**＜初回接種（3回）＞** 20日以上(標準的には20日～56日)の間隔をおく **＜追加接種（1回）＞** 初回接種終了後6か月以上（標準的には初回接種終了後12か月～18か月）の間隔をおく	**【ジフテリア】** のどについたジフテリア菌が増えて、高熱、のどの痛み、犬の遠吠えのようなせき、嘔吐などの症状が出ます。重症になると呼吸困難や神経麻痺、心筋症をおこし、命をおとすこともあります。 **【百日せき】** 百日せき菌の飛沫感染でおこり、連続したせきが長く続き、急に息を吸い込むので笛を吹くような音をともなう呼吸困難、チアノーゼ（くちびるが青くなる）、けいれん等が起こる病気です。肺炎や脳症などの重い合併症になることがあります。 **【破傷風】** 傷口等から破傷風菌が体に侵入し、菌が出す毒素はさまざまな神経に作用し、筋肉の激しいけいれんや呼吸困難などをおこします。顔の筋肉が硬直して引きつったような表情になり、口が開かなくなることが特徴です。重症になると強いけいれんで呼吸ができなくなります。 **【ポリオ[急性灰白髄炎]】** ポリオウイルスによって四肢に麻痺をおこす病気です。ヒトの便中に排泄されたウイルスが他のヒトの口から入り、咽頭または腸から吸収されて感染します。 日本では1980年の患者を最後に野生株ポリオウイルスによる麻痺患者の発生はありませんが、一部の国では今でもポリオの流行があり、いつ国内に入ってくるかわからないのでワクチン接種は欠かせません。 **【Hib感染症】** ヒブワクチンの欄を参照	ワクチンを接種したほとんどのこどもは免疫がつき、ジフテリア、百日せき、破傷風及びポリオの発病を予防。 Hibが血液や髄液から検出されるような重篤なHib感染症にかかるリスクを95%以上減らすことができる。	主な副反応として、接種した部位のはれや痛みなどの局所反応があります（10～30%）。発熱は多くても2～8%程度です。極めてまれな副反応として、アナフィラキシー（接種後30分以内に出現する呼吸困難や重いアレルギー反応のこと）がありますが、100万人接種で1人未満です。

✔	予防接種名	対象年齢	標準的な接種年齢	スケジュール・接種回数	予防する病気	有効性	副反応
□	**BCG**	1歳未満の者	生後5か月～8か月	生後1歳に達するまでの間に1回 ※ 細い9本の針を皮膚におしつけるスタンプ方式です。	**【結核】** 結核菌は肺で増え、炎症反応を引き起こし、やがて肺の組織が壊されていきます。初期の症状はかぜの症状と似ていますが、咳や痰、微熱などが長く続くことが特徴です。体重減少や食欲不振、寝汗をかくこともあります。進行すると、だるさや息苦しさが出てきたり、血が混じった痰が出て、呼吸困難などを引き起こし、死に至ることもあります。 結核菌は全身の臓器にも広がることがあり、特に免疫機能が未発達な小さなお子さんは重症化しやすく、結核性髄膜炎などを発症します。	結核の発病を、BCGワクチンを接種しなかった場合の4分の1くらいに抑えます。また、結核性髄膜炎など小児の重篤な結核の発病予防には特に効果的です。	ワクチン接種の正常な反応として、接種後2週目頃から、針の痕に一致した場所が赤く固くなったり、じくじくして化膿したようになることあり、特に接種後5～6週頃に最も強く現れるとされています。その後、やがてかさぶたができ、3ヶ月程で小さな痕を残すのみとなります。また、まれではありますが、重大な副反応として、ショック、アナフィラキシー（通常接種後30分以内に出現する呼吸困難や全身性のじんましんなどを伴う重いアレルギー反応のこと）、全身播種性BCG感染症（全身にBCG菌が広がる病気）、骨炎・骨髄炎・骨膜炎、皮膚結核がみとめられる場合もあります。
□	**麻しん風しん混合**	＜第1期＞ 生後12か月～24か月未満の者	–	生後12か月～24か月の者に1回	**【麻しん】** 主な初期症状は発熱、咳、鼻水、眼が赤くなる、目やになどです。一旦下がったようにみえた熱が再び39度以上の高熱となりますが、この頃に口の中を見ると白いブツブツ（コプリック斑）が見えます。その後、皮膚に発疹が出現し、1～2日のうちに全身に広がります。合併症がなければ7～10日ほどで治りますが、1000人に1人程度の割合で脳炎を合併することがあります。また、麻しんが治ってから数年～10年程経ってから発症する亜急性硬化性全脳炎は極めて重篤な病気です。 **【風しん】** 発熱、発疹、首の周りや耳の後ろのリンパ節のはれが主な3つの症状です。合併症としては、数千人に1人の頻度で、脳炎や血小板減少性紫斑病を起こします。また、妊娠20週頃まで（特に妊娠初期）の女性が風しんウイルスに感染すると胎児にも感染して、出生した赤ちゃんが先天性風疹症候群という、生まれつきの心臓病、白内障、難聴などを症状とする重い病気を発症することがあります。	1回接種で95%以上の人が免疫を獲得します。2回接種で99%以上の人が免疫を獲得します。極めてまれに接種後に麻しんや風しんにかかってしまうことがありますが、未接種でかかった場合に比べると症状は軽く、周りの人への感染力も弱いです。	接種後5～10日後に発熱がみられる人が2割程います。時に38度以上の高熱となり、まれに熱性けいれんを起こすことがあります。そのほか、接種した部位の腫れ、じんましん、発疹などの症状をみとめる場合もあります。また、極めてまれな頻度ですが、ショック、アナフィラキシー（通常接種後30分以内に出現する呼吸困難や全身性のじんましんなどを伴う重いアレルギー反応）、血小板減少性紫斑病をみとめる場合があります。
		＜第2期＞ 5歳以上7歳未満の者であって、小学校入学前の1年間	–	5歳以上7歳未満で小学校入学前1年間（4月1日～3月31日まで）の者に1回			
□	**水痘**	1歳以上3歳未満の者	＜初回＞ 1歳～1歳3か月 ＜追加＞ 1回目を接種して6か月～12か月を経過した後	＜初回接種＞　1回 ＜追加接種＞ 初回接種終了後3か月以上（標準的には初回接種終了後6か月～12か月）の間隔をおいて1回	**【水痘】** 水痘帯状疱疹ウイルスに初めて感染することで起こる病気で、特徴的な発疹が主な症状です。かゆみや発熱を伴います。発疹は斑点状の赤い丘しんから始まり、その後3～4日は水疱（水ぶくれ）となり、最後はかさぶたを残して治癒します。 ひとたび水痘に感染すると、一生体の中に潜伏感染し、加齢や免疫抑制状態等で再活性化し、帯状疱疹を発症します。	最近の国内の調査では、1回のワクチンを接種することで水痘にかかるリスクは77%減少し、2回接種で水痘にかかるリスクを94%減らします。また、ワクチンを接種すれば水痘にかかったとしても症状は軽く済み、合併症の頻度を下げることが知られています。	健康なお子さんに接種した場合は、ほとんど副反応はありません。免疫を抑える薬を服用されている患者さんが水痘ワクチンの接種を受けた場合、接種後14～30日に発熱を伴った丘疹、水疱が出現することがあります。
□	**日本脳炎（＊）**	＜第1期＞ 生後6か月以上7歳6か月未満の者	＜初回＞ 3歳以上4歳未満 ＜追加＞ 4歳以上5歳未満	＜初回＞ 6日以上(標準的には6日～28日) あけて2回接種 ＜追加＞ 1期初回接種終了後6か月以上（標準的にはおおむね1年）あけて1回接種	**【日本脳炎】** ブタなどの体内で増えた日本脳炎ウイルスが蚊によって媒介され感染する病気です。急な発熱、頭痛、吐き気などで発症しますが、急激に意識が低下して、けいれんや昏睡状態になります。日本脳炎ウイルスに感染した人のうち100～1000人に1人が脳炎になると言われております。脳炎にかかった時の致命率は20～40%ですが、治った後に神経の後遺症を残す人が多くいます。	第1期初回の2回を接種するとウイルスを中和できる免疫（抗体）ができます。追加接種をすると免疫がさらに高くあがります。その後、徐々に下がっていきますが、第2期接種でまた免疫があがり、長く免疫が続くと考えられています。日本脳炎にかかるリスクを75～90%減らすことができます。	主な副反応としては発熱、せき、鼻水、注射部位の紅斑やはれ、発疹などでこれらの副反応のほとんどは接種後3日後までにみられています。なお、極めてまれにショック、アナフィラキシー（接種後30分以内に出現する呼吸困難や重いアレルギー反応のこと）、急性散在性脳脊髄炎、脳症、けいれん、急性血小板減少性紫斑病などの重大な副反応がみられることがあります。
		＜第2期＞ 9歳以上13歳未満の者	9歳	1回			
□	**二種混合**	11歳以上13歳未満の者	11歳～12歳未満	1回	**【ジフテリア】** のどについたジフテリア菌が増えて、高熱、のどの痛み、犬の遠吠えのようなせき、嘔吐などの症状が出ます。重症になると呼吸困難や神経麻痺、心筋症をおこし、命をおとすこともあります。 **【破傷風】** 傷口等から破傷風菌が体に侵入し、菌が出す毒素はさまざまな神経に作用し、筋肉の激しいけいれんや呼吸困難などをおこします。顔の筋肉が硬直して引きつったような表情になり、口が開かなくなることが特徴です。重症になると強いけいれんで呼吸ができなくなります。	ジフテリアおよび破傷風に対するワクチン（三種混合、四種混合、五種混合など）を乳幼児期に反復して接種することにより、ほぼすべての人が予防するのに十分な抗体を獲得すると報告されています。これらの効果を持続させるため、二種混合ワクチンを接種します。	副反応としては、局所症状として接種部位に発赤、はれ、痛み、しこりなど、また全身症状として発熱、悪寒、頭痛、倦怠感、下痢、めまい、関節痛などがみとめられることがあります。いずれも一時的なもので、通常2～3日で改善します。ただし、しこりは1～2週間残ることがあります。極めてまれな副反応として、アナフィラキシー（接種後３０分以内に出現する呼吸困難や重いアレルギー反応のこと）があります。
□	**ロタウイルス感染症**	【ロタリックス】 出生6週0日後から24週0日後まで	初回接種は生後2月に至った日から出生14週6日後まで	27日以上の間隔の間隔をおいて2回内服	【ロタウイルス感染症】 ロタウイルスによる胃腸炎は、急激な嘔吐と水溶性の下痢便を頻回に排泄し、発熱が３割～５割程度みられます。嘔吐・下痢に伴う脱水やけいれん、腎不全、脳症などの合併のため入院治療に至るケースがあります。	両ワクチンとも、ロタウイルス感染による胃腸炎を約80%予防します。重症ロタウイルス感染症に限ると、約95%を予防するといわれています。	主な副反応は、ぐずり、下痢、咳、鼻水、発熱、食欲不振、嘔吐などです。ただし、非常にまれですが、腸重積症、血便排泄などが報告されています。
		【ロタテック】 出生6週0日後から32週0日後まで	初回接種は生後2月に至った日から出生14週6日後まで	27日以上の間の間隔をおいて3回内服			

（＊）《特例対象者》
平成17年5月30日～平成21年度にかけて実施された日本脳炎ワクチンの積極的勧奨の差し控えにより接種を受ける機会を逸した方（平成7年4月2日～平成19年4月1日までの間に生まれた方）で20歳未満の方は接種の機会が確保されています。